

# 愛に就ての問題

小川未明

青空文庫



私は母の愛というものに就いて考える。カーライルの、母の愛ほど尊いものはないと云っているが、私も母の愛ほど尊いものはないと思う。子供の為めには自分の凡てを犠牲にして尽すという愛の一面に、自分の子供を真直に、正直に、善良に育て、行くという厳しい、鋭い眼がある。この二つの感情から結ばれた母の愛より大きなものはないと思う。しかし世の中には子供に対して責任の薄い母も多い。が、そういう者は例外として、真に子供の為めに尽した母に対してはその子供は永久にその愛を忘れる事が出来ない。そして、子供は生長して社会に立つようになって、母から云い含められた教訓を思えば、如何なる場合にも悪事を為

し得ないのは事実である。何時も母の涙の光った眼が自分の上に注がれて居るからである。これは架空的の宗教よりも強く、また何等根拠のない道德よりももっと強くその子供の上に感化を与えている。神を信ずるよりも母を信ずる方が子供に取っては深く、且つ強いのである。実に母と子の関係は奇蹟と云つても可い程に尊い感じのするものであり、また強い熱意のある信仰である。そして、母と子の愛は、男と女の愛よりも更に尊く、自然であり、別の意味に於て光輝のあるもののように感ずる。

私は多くの不良少年の事実<sup>に</sup>就いては知らないが、自分の家に来た下女、又は知っている人間の例に就いて考えて見れば、母親の所謂<sup>いわゆる</sup>しっかりした家の子供は恐れというものを感ずる、悪い

という事を知る。しかし、母親が放縦であり、無自覚である家の子供は、叱つても恐れというものを感じない。そして悪いという事に就いて根本的に無自覚である。唯世の中は胡魔化して行けば可いというような事しか考えていない。この一事を見ても、子供心に信仰を有たしめるものは、全く母の感化である。

最近の新聞紙は、三山博士の子供が三人共家出をして苦しんでいるという事実を伝えている。その記事に依ると、本当の母親は小さいうちに死んでしまつて、継母の手に育つたという。博士は三人の子供が三人共学問が嫌いで、性質が悪くて家出をしたように云っているけれども、これを全く子供の罪に帰する事は出来ぬ。「妻は小学校しか卒業していない女だから、子供を虐める事は出

来ない。自分が子供を叱る時には妻は一切口を出さぬ事にして  
る。」とか云つて、博士はそれを継母の罪でないように云つてい  
る。しかし、子供の教育は必ずしも母親自身の学問の程度に關る  
ものではない。それに学問がないから虐めることが出来ないなど  
というのは、如何にも可怪おかしな言葉である。私は何も博士の家庭  
に立入つて批評しようとするものではないけれども、若しこれが  
本当の母であつたならば、又本当の母でなくとも愛というものが  
あつたならば、如何に博士が嚴重に子供を叱ろうとも、それが為  
めに失敗する事はなかつたであらう。

私はこの社会に於て弱者に対して、若しくは貧窮者に対して、  
これを救うという場合に、単にそれを氣の毒だから助けてやると

か、若しくは慈善は善なる行為であるから救うとかいうのでは、  
反つてその人間を墮落させるのみで、決して社会の爲めになるも  
のではないと思う。若しこの社会の有力なる識者が、真に母が子  
供に対する如き無窮の愛と、厳肅さとを有つて行うのであれば宜  
しいけれども、そうでないならば寧ろ自然の儘に放任して置くに  
如かぬ、彼等の多くは愛を誤解している。

茲ここに苦しんでいる人間があるとする。それを傍の人間が救う、  
その行為が果して愛であるか否かは余程疑問である。苦しんでい  
る人間をして飽くまで苦しませるといふ事は、その人間が聴やがて何  
物かに突当る事を得せしむるものだ。半途でそれを救うとしたな  
らば、その人間は終に行く所まで行かずして仕舞う。凡ての窮局

によつて人間は初めてある信仰に入る。自ら眼覚める。今の世の中の博愛とか、慈善とかいうものは、他人が生活に苦しみ、また境遇に苦しんでいる好い加減の処でそれを救い、好い加減の処でそれを棄てる。そして、終にこの人間に窮局まで達せしめぬ。私はこんな行為を愛ということは出来ぬ。本当の愛があれば、その場合それを凝視すべきである。眞の傍觀者に愛がないということとは云えない。一つの事実をじつと凝視するということ事は、即ち凝視そのものが私はある意味で愛そのものだと思ひ得ると思う。この意味から自分の敵に対しても凝視を怠つてはならぬ。

私一個の考から云えば、人を愛するということ事も、憎むということ事も同じである。憎み切つてしまう事が出来れば、そこに何等かこ

の人生に対して強い執着のある事を意味する。残忍という事もどれ程人間というものが残忍であり得るか、残忍の限りを盟した時、眼を掩つてそれ以上の残忍は為し得ないという時そこに本当の人間性はあり得る。

私は如何なる場合にも中途半端の虚偽を憎む。現代の多くの人々はこの中途半端に居る。しかも、人が苦しみを経験し、若しくは苦痛を経験し、若しくは生活上の奮闘を余儀なくされている場合、社会の同情、博愛、慈善事業、宗教家等に依つて救うということは何時まで経つてもその人間に本当の霊を見せずにしまふものである。極端なる苦痛は最後に確信と光明を与えると信ずる。

今度の戦争の事に対しても、徹底的に最後まで戦うということ

は、独逸ドイツが勝つても、或は敗けても、世界の人心の上にはつきりした覚醒もたらを齎すけれども、それがこの儘濟んだら、世界の人心に對して何物をも附与しないであろう。

# 青空文庫情報

底本：「芸術は生動す」国文社

1982（昭和57）年3月30日初版第1刷発行

底本の親本：「生活の火」精華書院

1922（大正11）年7月10日初版

入力：Nana ohbe

校正：仙酔あびす

2011年11月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 愛に就ての問題

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>